



新しい宗教運動に関する 棄教者による証言の信頼性

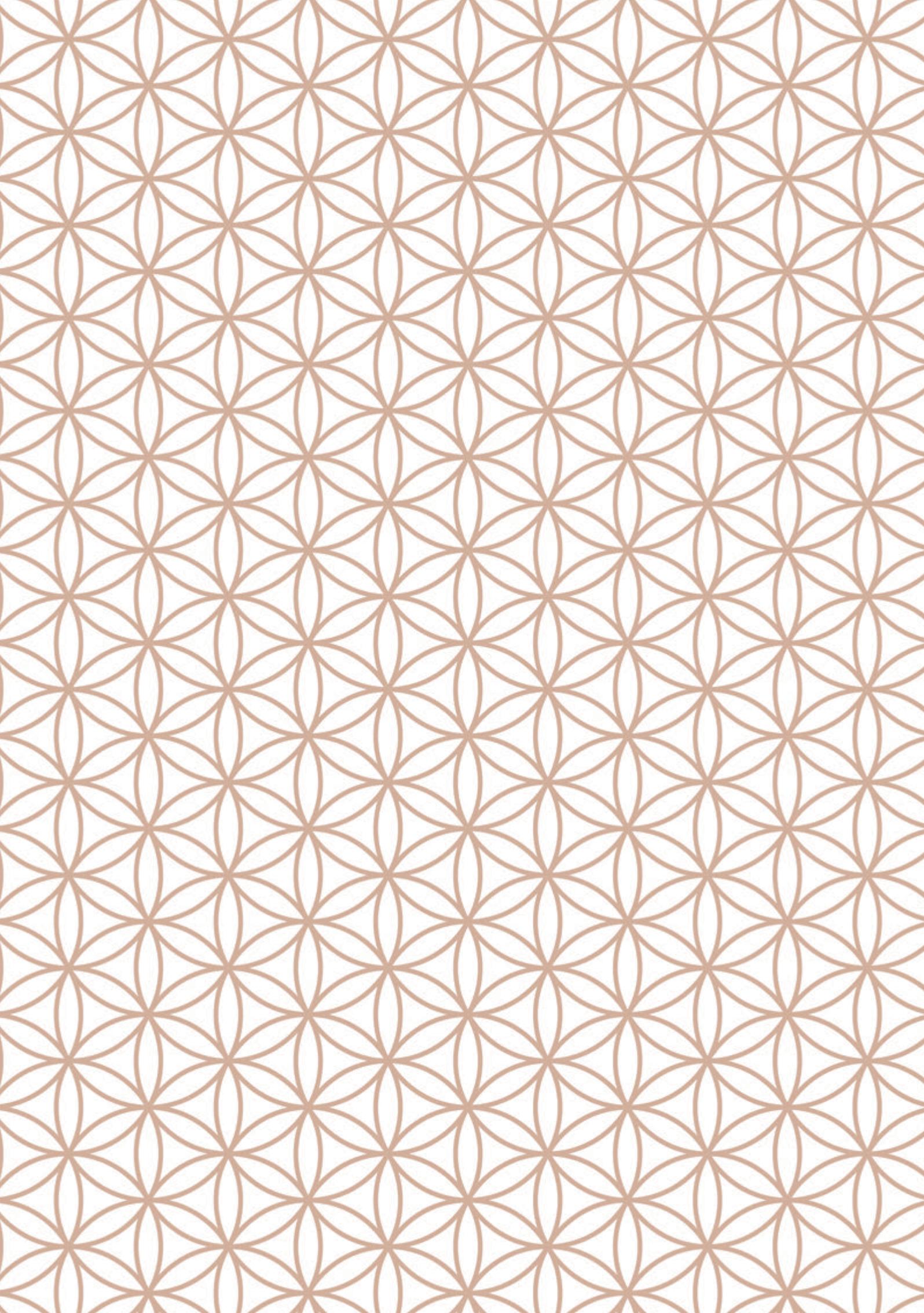
ロニー D. クリーバー博士
宗教学教授
南メソジスト大学
アメリカ合衆国テキサス州ダラス
1995年1月24日

新しい宗教運動に関する 棄教者による証言の信頼性

新しい宗教運動に関する
棄教者による証言の信頼性

目次

I.	専門経歴	1
II.	課題	2
III.	過去の棄教	3
	III.I. ヘレニズムのユダヤ教における棄教	3
	III.II. 異教徒の宗教における棄教	4
	III.III. キリスト教会における棄教	4
IV.	現在の棄教	5
	IV.I. 離脱の種類	6
	IV.II. 再加入の戦術	8
V.	結論	9



ロニー D. クリーバー博士
宗教学教授
南メソジスト大学
アメリカ合衆国テキサス州ダラス
1995年1月24日

新しい宗教運動に関する 棄教者による証言の信頼性

I. 専門経歴

私は、1955年にハーディン・シモンズ大学から極めて優秀な成績で心理学の学士号を受けました。1959年にニューヨーク、ユニオン神学校で神学修士を優秀な成績で修了しました。1963年にデューク大学から宗教と哲学の博士号を受けました。

以前、1962-65年にエル・パソ、テキサス大学哲学科で常勤の地位を持ち、准教授に昇進、1965-69年はサンアントニオ、トリニティ大学宗教科、1969-75年はカナダ、オンタリオ州ウィンザー大学宗教学科で教授に昇進しました。1973年以降、南メソジスト大学で常勤の宗教学教授であり、1975-86年および1993年から現在に至るまで宗教学科長を務めています。

長年、アメリカ大学教授協会、科学的宗教学学会、アメリカ神学学会、カナダ宗教学学会、カナダ神学学会、宗教学会議などで高位のメンバーであり、官公庁に公職を持ち、専門家委員会の議長を務め、これら専門学会のほとんどで編集委員会の委員を務めています。

私は、現代宗教における専門知識を備えた宗教・文化哲学者です。以上のように、私は主に、主流および新しい宗教運動に関心を持っており、それは、これら新旧の宗教が現代生活の問題や変化に反応するからです。私は南メソジスト大学で、比較宗教学、宗教哲学、宗教社会科学のさまざまなコースを、学部学生、院生レベルで定期的に教えてい

ます。また、自分の専門領域で学術的研究と出版のプログラムを続けており、現代宗教思想を扱った、『急進的キリスト教』(1968年)、『H. リチャード・ニーバー』(1977年)、『粉々に壊れたスペクトル』(1981年)、『ひどい従順な人々: 宗教と革命に関する随筆』(1987年)、そして『ダックスのケース: 医療倫理と人間の意味に関する随筆』(1989年)という5冊の本の出版や、『ハーバード神学評論』、『宗教ジャーナル』、『アメリカ神学学会ジャーナル』、『宗教研究』、『人生の宗教』、『宗教研究評論』、そして『宗教の科学的研究のためのジャーナル』など主要な学術雑誌に数多くの記事を執筆しています。

現代宗教の専門家として、私はサイエントロジー教会の広範囲にわたる学術的な研究を行いました。私はL. ロン ハバードによって書かれて出版された、ほとんどの主要な理論的教科書を読んでいます。ハバード氏と教会の管理運営および聖職オフィサーによって用意された技術的、管理運営の方針の多くを吟味し、教会によって提供される、さまざまなコースで使用するトレーニング・マニュアルの代表的な例を調査しました。また、サイエントロジー教会の数々の新聞や雑誌、あるいは学術的研究も読んでいます。加えて、私は実践的なサイエントロジストと話をし、彼らのニューヨーク市46番通りの教会、82番通りのセレブリティー・センターと、フロリダ州クリアウォーターのフラッグ・サービス・オーガニゼーション、ダラスのセレブリティー・センターを訪問しました。

II. 課題

私は、サイエントロジー教会から、ふたつの大きな問題について専門家としての意見を述べるように求められました。(1) 新しい宗教運動における棄教の発生率、および(2) 彼らの以前の信仰と実践に関する棄教者の報告の信頼性です。これらのふたつの質問は、新しい宗教運動を適切に理解するのに非常に重要です。というのも、メディアの暴露においては、以前の信仰と実践について、また非伝統的な宗教運動の学術研究でさえも、そのような棄教者たちを信頼できる情報提供者として選出することが多いからです。賠償を求める訴えはさらに、特定数の棄教者たちは、以前の宗教団体の欺瞞的かつ詐欺的な行為、または身体および感情に対する強迫に対して、さまざまな形で損害賠償を求めています。これらの当事者は、しばしば政府機関や敵対的な反体制派のいずれかによって、新しい宗教にもたらされたその他の事件に対する専門家としての証人の役割を果たしました。

特別な注意が、メディアによって新しい宗教運動の棄教者たちに与えられ、以前の宗教団体から被ったとされる損害賠償を求める訴えは、今世紀の棄教者たちに対する姿勢と扱いに大きな

影響をもたらしました。過去、棄教者たちは彼らの信仰の放棄に対して徹底的に非難されました。実際、棄教の対象となった宗教団体が棄教者に対して行った懲戒的措置は、しばしば国家の力によって強化されました。対照的に、昨今の棄教者は、宗教団体に対して懲罰的措置を取る可能性が高く、時には法の援助を伴うこともあります。新しい宗教運動の棄教者たちは、彼らが口にする過去の宗教上のひどく否定的な話のために、しばしば裏切り者としてというより、犠牲者として見られます。しかし、これらの棄教者の記述が、過去の宗教団体や活動の信頼できる報告書であるかどうかは疑問が残ります。

サイエントロジー教会の棄教者の信頼性に関する特別な関心は、その教会が、棄教者を基にしたメディアによる暴露と民事訴訟の標的であるという事実に基づいています。以下の本格的な議論を見越して、私は専門的訓練と学術研究から、棄教者が新しい宗教運動についての信頼できる情報源として、マスメディア、学術団体、法制度、または政府機関によって**批判**なく受け入れられるべきではないと確信しています。棄教者は常に、以前の宗教団体や活動の、宗教的信仰と実践の偏った報告書を提出する傾向がある個人として見なされなければなりません。

III. 過去の棄教

「棄教 (apostasy)」という言葉は、もともと反乱や離脱と呼ばれていたギリシャ語の「apostasía」の音訳です。宗教の文脈上における使用は、意図的に宗教を放棄することを意味します。棄教は、異端信仰と密接に関係しています。特定の宗教における異教の信仰と実践のための正統派の拒否は、真の宗教の全面的な拒否と見なされます。したがって、棄教は私的な出来事ではなく公的なこととして理解されなければなりません。棄教は、個人の宗教的な疑念でも退廃した宗教的実践の問題でもありません。棄教とは、以前の宗教的信仰と実践を公に放棄し、糾弾することです。棄教者の多くは改宗のための放棄ではなく、宗教を完全に放棄するでしょう。

III.I.ヘレニズムのユダヤ教における棄教

ヘブライ語の聖書は、台頭してきた多神教の宗教と文化に何度も戻った、古代イスラエル国民全体の棄教を強く非難しています。しかし、個人による最初の棄教行為は、アンティオコス・エピファネスの治世の間に生じました (紀元前175-164年)。多くのユダヤ人がこの異教の皇帝によって強制され、後にギリシャの神々を選び、神への崇拝を放棄した時です。ヘレニズム文化に対する情熱は、マカバイ戦争で、ユダヤ法とユダヤ民族主義の回復に成功するまで、ユダヤ人の宗教および文化に深刻な侵略をもたらしました。散発的な棄教はその後も続きましたが、ユダヤ法のような放棄はユダヤ人社会で最も厳しい非難を受けました。

後のローマ統治のもと、ユダヤ人は、ユダヤ人テトラルキアの名ばかりの政治的支配下で自由に宗教を實踐することが認められました。この時期に宗派運動は盛んになり、時間の経過とともに、ユダヤ教から完全に分離したキリスト教の運動ほど強力なものはありませんでした。分派した宗徒とキリスト教徒は、棄教者として非難されました。さらに、そのような棄教はユダヤ教徒の宗教、公民権の中で融合されたため、宗教的な条件だけではなく政治的にも非難されました。棄教は、神に対する罪はもちろん、国家に対する犯罪とも見なされました。棄教者は、公民権と救済の両方を否定されました。

III.II.異教徒の宗教における棄教

概して、排他性という考えが多神教的性質であることを考慮すると、ギリシャとローマの宗教には馴染みがないものでした。異教のカルトたちは、宗教的慣習や哲学団体に張り合うことに執着したメンバーを除籍しませんでした。しかし多くの場合、異教の宗教の神々は公民当局によって正式に認められ、国家の幸福と認識されました。そのような場合、政治的に認可された宗教の放棄は、世間の批判や国家が支援する迫害も受けました。ギリシャ東部のキリスト教徒は、国民の神々を拒絶したため無神論の罪で告発されました。西方ラテン世界では、キリスト教徒は彼らの祖先の宗教を放棄した罪で告発されました。いずれの告発についても、公民の神に敬意を表することを拒否した初期のキリスト教徒は非難され、多くは国家に対する反乱のために迫害されました。要約すると、棄教はその祖先の習慣、もしくは公民の神々が拒絶された時にのみ、異教徒社会の問題となったのです。

III.III.キリスト教会における棄教

多くの初期のユダヤ教徒や、キリスト教へ改宗した異教徒たちは、引き続きユダヤ教の儀式法を守り、あるいは異教の宗教祭に参加しました。最初の頃は、古い宗教習慣の持続は棄教とは見なされませんでした。キリスト教会が、ユダヤ教とグノーシス主義形式のキリスト教信仰から分離した時に、棄教はようやく明確な問題になりました。すでに新約聖書の中で、棄教は偽の教師と預言者に関連しており、彼らの出現は、その時代の黙示的な終焉の兆しになるとされています。初期の世紀では、棄教は、正統派のキリスト教が異端的かつ分裂的な動きから切り離されていたため、主に内部での問題でした。しかしコンスタンティヌスの改宗によって、棄教は法律で罰せられる民事犯罪となりました。こうして、教会と国家間の千年以上の相互協力が始まりました。国家は、教会を棄教から守るために権力を行使し、教会は暴動から国を守るため、聖典の力を利用しました。棄教者は宗教的権利だけではなく、公民権も奪われました。

教会と国家間の結び付きがしっかりしていたところでは、キリスト教のあからさまな放棄はまれでしたが、隠れた棄教の動きさえも盛んに抑制されていました。拷問は自白を引き出し、改宗を促すために自由に利用されました。棄教者と教会分離論者は教会から破門され、国家によって迫害されました。

大規模な棄教は、キリスト教の歴史においても起こりました。8世紀の東方正教会と西方教会間のいわゆる「大分裂」は、キリスト教国内で最初の大きな分裂となり、相互の破門をもたらしました。16世紀の宗教改革は、キリスト教徒とキリスト教をさらに分裂させました。各宗派は、新約聖書教会の真正の信仰と実践を回復したと主張し、それによってキリスト教のさまざまな対立する見解を棄教の地位に降格させました。

さらに領土独占を享受した数々のプロテスタント教会は、宗教的に許可された破門という武器を利用し、真正のキリスト教のため、対抗者の主張に対する迫害を政治的に後押ししました。宗教戦争の終結と寛容宣言の制定があつて初めて、このような棄教行為への盛んな政治的抑圧が終わりました。正式および非公式の宗教的制裁は、破門や権利剥奪から非難や忌避に至るまで、依然として課されていました。

この要約が示すように、棄教者への非難は、排他主義的主張を、ふさわしい宗教的信仰と実践を持つ唯一の宗教とする、過去すべての宗教の「合法化戦略」として役立ってきました。政治的、宗教的な忠誠心が合わさった国家および領土の環境では、宗教的かつ法律的制裁が棄教に対して課せられました。棄教者は、救済の手立てと公民権を奪われました。このように棄教者は、教団の純粋さと政治秩序の安定を揺るがす、偽りと不道德の提供者と見なされました。

現代社会では、宗教伝統が彼らの教義主張を軟化させ、世俗主義社会が宗教的な支持から離れていくにつれて、棄教はますます問題にならなくなってきました。今世紀の宗教的多元論の受容と宗教信仰の民営化は、改宗した棄教者個人を法的、宗教的不名誉の大部分から解放しました。確かにローマカトリック教会は依然として破門という武器を保持しています。プロテスタントの原理主義者は異端の危険性を糾弾し、敬虔（けいけん）な家族は、時に他宗教の人間と結婚したり、改宗したりする子供を勘当するかもしれません。しかし、これらの制裁措置は、かつて行われたような公的または私的な影響力を持っていません。多元的かつ世俗的な文化の中で絶対的な権威を失った、宗教独断論者の儀式のまね事です。

IV. 現在の棄教

ここ30年で、棄教は再び民間だけではなく公的な問題になっています。しかし上述のように今日の棄教者の扱いは、過去に見られたやり方とはほとんど類似点がありません。1960年代以来、さまざまな新しい宗教運動が現代民主主義社会全体に出現してきました。これらの少数派の宗教運動の多くは、会員の「全体主義化」要求を行い、彼らの宗教的な教えへの傾倒および教団

への完全な献身を主張します。他の新しい宗教は、共同体の生活と伝道において、全会員の完全な献身を必要としませんが、それでもなお、教義的、倫理的、儀式的な基準を厳格に遵守する必要があります。すべての新しい宗教はほとんど、主流の宗教とは異なる信仰と実践を保持しています。驚くべきことではありませんが、こうした厳しい要求を受け、関与した人々の中には、特定の宗教運動が彼らのためではないとし、やめることをすぐに決定する者もいます。関係者の多くは、自らの過去の体験を精神的な行程におけるもうひとつの段階と肯定的に見なしているため、彼らの離脱は通常気付かれません。

しかし上記とは対照的に、自発的に離脱する人々の中には、裁判所や報道機関を通して以前の宗教団体や活動を公然と攻撃する、悪名高い少数の離脱者がいます。これらの未知の新しい宗教について、好奇心が強い一般人と、恐れている一般人両方に歓迎される情報源として、そのような棄教者たちは、たびたび社会ののけ者ではなく、「世間の関心の的」として扱われます。しかし以下で述べるように、控えめに感謝している好意的な以前の会員も、新しい宗教運動に対して声高に憤慨する棄教者も、彼が以前に所属していた宗教運動の客観的かつ権威ある解説者として取り上げられはしません。

IV.I. 離脱の種類

一般社会において、新しい宗教運動からの離脱が自発的かつ肯定的な行動である、ということはほとんどないと広く誤認されています。さまざまな「マインドコントロール」技術によって、会員の思考や行動を非常に厳しく制御する集団としての、新しい宗教のイメージは、以前の会員の恐ろしい話に対するメディアの病的な執着と反カルト集団のプロパガンダの結果、一般の人々の想像力に深く植え付けられています。新しい宗教運動についての初期の多くの学術的記述でさえ、脱洗脳 (デプログラミング) が不本意な入院のいずれかにより、宗教団体から強引に離脱させられた棄教者を対象とした研究に完全に基づいた、誤った概念を永続させてしまいました。しかし、最近のいくつかの学術研究は (例えば、Cult Controversies: The Societal Response to New Religious Movements, London: Tavistock Publications, 1985; Stuart A. Wright, Leaving Cults: The Dynamics of Defection, Washington, D.C.: Society for the Scientific Study of Religion, 1987)、ふたつの全く異なるタイプの棄教が存在することを明確に示しています。これは新しい宗教運動の棄教のふたつの異なる評価と相関する可能性があります。

新しい宗教運動からのごく一部の少数派の離脱だけが、強制的な棄教の結果です。個人を新しい宗教運動から「救う」ための強制的な取り組みは、常に部外者によって着手されます。新し

い宗教への個人の関与に反対する親族は、なぜその人が加わったのか、そしてその人をその宗教からどのように離脱させることができるのかという二重の問題に直面しています。

最初の問題は、典型的には「洗脳」の説明によって答えられます。そして次に、第二の問題に対する「脱洗脳」という解決策を正当化します。洗脳のシナリオは、新しい宗教への改宗はどのようにして、部外者にはそのようなばかげた信仰と実践のように思われるものを受け入れ、守るようになるのかを「説明」します。当の個人は、マインドコントロールのさまざまな心理学のおよび社会学的技術の犠牲者と見なされます。その状況を考えると、その人を救う唯一の手段は、そのような捕らわれの身から個人を解放する、あるドラマチックな形式の介入です。強制的な誘拐と脱洗脳、もしくは法律上の後見人と入院の援助は、新しい宗教の誤りに導かれ、操られた信者から救うために必要な手段として正当化されます。どのような形にせよ、洗脳の主張と脱洗脳の正当化は、このような「救助活動」のすべての根幹です。

そのような強要された棄教者たちは、メディアでの暴露や、以前の宗教団体に対する訴訟で高い視認性を示しているため、新しい宗教運動を取り巻く論争を助長してきました。「カルト生存者」としての彼らの有用性は、一般の人々が得られる、新しい宗教運動に関する唯一の情報であるメディアの題材になることです。過程の段階で、洗脳と脱洗脳の論理的関係は反対に働きます。脱洗脳方法が「うまくいく」という他ならぬ事実は、洗脳シナリオが当てはまる一部の元会員と同様に、関係する外部者による証拠として受け取られています。脱洗脳によってもたらされた彼らの信念と振舞いの急激かつ根本的な変化は、救い出された個人が悪意ある宗教の囚人ではないとしても、事実上被害者であったという明確な証拠と見なされます。さらに、彼らが「愛する人を戻した」という事実は、親類が他の人たちに対して「子供を元に戻す」ことを促します。彼らの物語を公開し、それを支持する反カルト団体を支援することによってです。このようにして、ほんの少数の棄教者とその「救助者」は、新しい宗教運動からのすべての離脱者に対する国民の認識を形作りました(すなわち、より適切には形を歪めました)。

世論とは対照的に、新しい宗教運動からの離脱の圧倒的多数は、自発的な棄教の問題です。さらに自発的に去った人々の大多数は、過去の経験の特定の側面について積極的に話すでしょう。特定の宗教運動が、個人的な期待や宗教的な要求を満たすことができなかったことを容易に認めています。多くの自発的な離脱者は、以前の宗教団体や活動からいくらかの償還価値を取り戻す方法を見つけています。

しかし、以前の宗教団体や活動を厳しくあら捜しする、激しい敵意を持ったままの新しい宗教運動からの自発的な棄教者たちも一部います。かつて愛した宗教団体からの離脱の原動力は、敵

意を持った夫婦の別離と離婚に類似しています。結婚と宗教は両方ともかなりの献身を必要とします。関わりが大きければ大きいほど、粉々になるくらいのもより大きい精神的な外傷を負います。献身が長ければ長いほど、失敗した関係のために他方を責める必要がより急務となります。時間の経過とともに宗教に幻滅した、長期かつ濃密に関わった新しい宗教運動の会員は、以前の宗教団体や活動にすべての責任を負わせることがよくあります。彼らは小さな欠陥を巨大な悪に拡大します。個人的な失望を悪意のある密告に変えます。信じ難い虚偽すら伝え、以前の宗教に害を与えるでしょう。驚くことではありませんが、これらの棄教者たちは事の終わった後、新しい宗教運動からの強制的な離脱を正当化するために同じ洗脳シナリオを引き合いに出し、たびたび訴えます。

IV.II.再加入の戦術

以前の宗教団体や活動からの離脱は、新しい宗教運動における信仰を放棄する過程の半分に過ぎません。自発的であろうと強制的であろうと、棄教者は主要な文化に戻り、新しいアイデンティティーと世界観を再構築するという、より厄介な課題に直面します。再加入は新しい宗教運動に参加する前の、その人の以前の生活文化と世界観に戻ることを単に意味することはめったにありません。「放蕩」息子または娘は別人として戻り、新しい心理的および社会的状況に、何らかの形で説明し、結び付けなければならない経験の一連全体をもたらします。この移行は、多くは家族制度、社会ネットワーク、宗教団体、教育機関、反カルト組織の影響を受けます。驚くことではありませんが、これらのグループの影響は、棄教者の過去の宗教活動や団体の解釈を深く色づけします。

彼らの暇乞(いとまご)い方法にかかわらず、棄教者は、非伝統的な宗教運動からの早期転換とそれに続く離脱の両方を考慮しなければいけません。彼らは反カルト組織、または原理主義宗教団体から求められている自己正当化を受けることが多く、両方ともが唐突な信奉と、同様に唐突な新しい宗教運動の放棄を正当化するための洗脳の説明を彼らに提供します。これらのグループによって提供される情報は、たいてい非常に否定的であり、残された組織に対してひどく偏っています。より正確に言えば、これらのグループは彼らに誘惑と解放の話を伝えるために、「共有できるもの」を提供します。数多くの社会学者は、「カルトサバイバル」のこれらの伝記は、囚われと解放の借用したシナリオの影響を示す高度に様式化された記述であることを指摘しています。ひとつひとつの報告が、社会的隔離、感情操作、物理的剥奪、経済搾取、催眠操作の予め思い描かれた物語です。これらの「残虐な物語」は、新しい宗教を不合理的な信仰と不道徳な振舞いによって告発するためだけでなく、個々の棄教者を許すための両方に役立ちます。彼らはまた、宗教の自由と国家の秩序への危険な脅威として新しい宗教の公的な認識を与え、形作ります。この否定的な報道を考えると、反カルト組織や原理主義宗教団体の直接的な影響下でない棄教者でさえ、彼らが残した宗教の否定的な記述によって多くは影響を受けます。

V. 結論

上記の分析は、新しい宗教運動における棄教の一定の発生率はあるものの、不適合な宗教から離脱した圧倒的多数が、過去の宗教団体や活動に関して永続的な憎悪を抱かないことを明確に示しています。彼らは宗教上の要求や希望は挫かれたことを率直に認めています。過去の経験から何らかの肯定的な意味と価値を実感することができました。対照的に、かつて忠誠心を主張した宗教団体を破壊するのではなく、信用を傷つけることに多くをつぎ込む棄教者の数ははるかに少ないのです。ほとんどの場合、これらの棄教者たちは家族や反カルト団体の介入によって教団から強制的に離脱させられたか、もしくは新しい宗教団体から自発的に脱退した後すぐに、反カルト団体や文献の影響を受けました。

新しい宗教における熱心で強硬な反対派が、以前の宗教団体や活動に対して証言に役立つものを準備し、意欲的なことから、一般の人々、高等教育機関、裁判所に新しい宗教についての歪んだ見解を提示することは否定できません。そのような棄教者は、常に自分の行動の責任を宗教団体に転嫁することによって、自分自身の正当性を立証するシナリオを行動に移します。実際には、新しい宗教運動に対してたびたび引き合いに出される多様な洗脳シナリオは、政府機関や世論の目に映る非伝統的な宗教の信念や実践を、信用できないものとする計画的な取り組みでしかないとして、社会学者や宗教学者によって徹底的に否定されてきました。そのような棄教者は、信用におけるジャーナリスト、学者、または法学者によって、信頼できる情報提供者と見なされることはほとんどありません。自らのアイデンティティーと自尊心を再確立しようとする現在の努力に過去の宗教的経験を照らして解釈するので、恨みのない自発的な離脱者の記述でさえ慎重に使用しなければなりません。

要約すると、一見して、新しい宗教からの棄教者は、個人的客観性、専門的能力、専門家による証言に求められる情報に通ずる知識の基準を満たしていません。

ロニー D. クリーバー
テキサス州ダラス
1995年1月24日付

